

りびんぐらいぶず 令和元(2019)年6月第3号

お念仏の声が聞こえるために

ご讃題

諸有衆生 聞其名号 信心歡喜 乃至一念 至心回向 願生彼国 即得往生 住不退転

(Ref 『佛説無量寿經 卷下』聖教全書三經七祖篇 p43)

あらゆる衆生、その名号を聞いて信心歡喜せんこと、乃至一念せん、至心に回向したまへり彼の国に生まれんと願ずれば、すなわち往生を得、不退転に住せん。

(Ref 『仏説無量寿經 卷下』註釈版聖典 p41)

はじめに

本願念仏は、キリスト教や禅宗にない独自性を有する。本願念仏の声(阿弥陀様の本願招喚の勅命)を聞かせて戴くことができれば人は例外なく阿弥陀如来のお救いに与る。

ところが、そのお念仏が称えられない。

それは、一つには、衆生の側に原因がある。お念仏一つでお救いに与ると聞かせて戴いたとしてもそのお念仏を称えることができない傲慢さを衆生の側が有しているからである。

そのことをお東の学僧、藤場 俊基師が心理学的側面から『親鸞に聞く 観無量寿經の意(こころ)』に縷々お書き戴いている。

お念仏がとなえられない種々相

私が見聞きしたお念仏の称えられない種々相は次のようなものである。

当院では、今から七年前、仏教壮年会員さんから「私ら本格的にお聴聞がしたい」というご要望が出た。爾来、毎月第一日曜の夜八時から、お聴聞の会(御法話会)を継続開催して今日に至る。お聴聞の会では当然のことながら自然にお念仏の声が聞こえる。

漸く入門段階を脱したと思われた頃、報恩講のお客僧にはこれという立派なお客僧をお迎えするようになった。

ところが、お客僧の御法話の第一座が終わるとシーンと静まりかえってしまう。お念仏の声が聞こえなくなる。住職はまことに淋しくも恥ずかしくもなり、お客僧の足音が後門から遠ざかった頃、お参りの皆様に向かって「お念仏の声が聞こえませんか」と云うと、「ああ」という声と共に、おもむろにお念仏の声が出るようになる。二~三十人もの賑やかなご法座でも静まりかえった雰囲気では誰一人最初の念仏発音がない。お念仏の意義に気付いて居たとしても最初のお念仏を出すのに心理的に抵抗がある姿である。

これから先は、「お領解出言」に習って、リーダーを決めておいて御法話が終わると同時に「お念仏ご唱和」の発音をして貰おうかと考えているところである。

今一つは多分に教学的な側面である。

どなたかと特定してご紹介することは憚られるが、あるとき、聞法会館の大会議場でキリスト教との対比シンポジウムでのこと「信心を頂戴すると今度は声になって出てくる。そこまでは簡単に云えるのですが」とおっしゃった(Ref 平成三十年『宗報』九月号)。

声になって出てくるというのはお念仏のことをさしている。

信心を頂戴すると今度は声になって出るのだから、御堂法話でお念仏が聞こえない有様は、どう説明すればよいのでしょうか。誰も信心獲得していないということになりませんか。

おっしゃったお方は宗門を代表するお方だから(註)影響力が大きく随分がっかりしたものです。これは教学的には「信心正因 称名報恩」という覚如上人が確立されたご法義に事実上影響を受けた姿である。

(註)今から六年前、「御門主と前門様とのご対談本『浄土真宗のこれから』(Ref 平成二十五年四月築地本願寺刊)が出版された。

ご対談本では、「信心正因 称名報恩」では救われたいとも救われたとも思っていない現代人には伝わらない。

現代人には、「南無阿彌陀佛」は、感謝の念仏だと説く前に、阿彌陀様が喚(よ)んでいて下さるお喚び声だと伝える方が理解されやすいのではないかと感じており、(私自身も)その旨ははっきりと伝えたいと思っていると明言された。

「南無阿彌陀佛」は阿彌陀さまのお喚び声で、それが私に聞こえてくるし、私が戴けば今度は私の口から出ていく、とお聞かせ戴いた。問題は「私が戴けば今度は私の口から出て行く」という御言葉の曖昧さである。

「私が戴けば」が信心獲得を指すとすると、「信心正因 称名報恩」の曖昧さは何一つ解決されていない。

ここは、はっきりと伝えたいと思うとおっしゃったのだから、私が称えれば聞こえて下さる南無阿彌陀佛は、「私が信心獲得して居ようが居まいが(二)、阿彌陀様のお喚び声であると明言して戴くべきところであった。

(二)「聞こえて下さる南無阿彌陀佛」は称える者の信心獲得如何によらず阿彌陀様のお喚び声であるという解釈は、曾て岡 亮二先生によって明確化された。

覚如上人の「信心正因 称名報恩」成立過程

覚如上人の「信心正因 称名報恩」のご法義の成立過程をお訪ねすると、『口伝鈔』第二十一通「一念にて足りぬとしりて、多念をはげむべしということ」(Ref 註釈版 p910)に行き当たる。「信心正因 称名報恩」は、『往生礼讃』(Ref 七祖註釈版 意訳 p659)の「上尽一形(じょうじんいちぎょう) 下至一念に由来する。

「下至一念」は、本願に乗ずる往生決定(けつじょう)の時剋(とき)を云い、「上尽一形」は、往生即

得のうへの仏恩報謝の勤め(いのちあらんほどは念仏すべし)を意味する。

世の人がつねにも思うことには、上尽一形の多念も宗の本意と思って「下至一念」とは、それが叶わない機(人)の為に説かれた捨てがてらの(ついでに説かれた)教えのように心得ているがこれは弥陀の本願に違背している。

なぜなら、如来の大悲は、短命の根機(無常迅速の機、死を目前にした人)を救いの目当てとされたのだから、「もし多念をもって本願とせばいのち一刹那につつまる無常迅速の機、いかでか本願に乗すべきや。されば真宗の簡要、一念往生をもって淵源とす。」とおっしゃったのがそれである。

短命の根機(死を目前とした)人を対象とする限り、多念では本願に乗ることが難しく、一念往生を正当と主張されたのであった。

されば、覚如上人の「信心正因 称名報恩」は、短命の根機適用論を以て浄土真宗のお法り一般に敷衍して適用されたものである。

しかしながら、無常迅速の機でも一念往生を可能とするなら、ただでさえ私は若く「お聴聞」はまだまだ速いと嘯きがちな衆生に、尚更無常迅速のそのときまでお聴聞を疎かにさせる虞れはないのであろうか。合掌。

(後書き)親鸞聖人ご自身は、一念多念の争いに対して無常迅速の人を根機とする論理は展開されなかった。

法然聖人門下に起こった一念多念の争論に対しては、一念や多念に偏執してはならないことを諭されたのが親鸞聖人の『一念多念文意』である。

その構成は前段を「一念をひがごととおもふまじき事」の要文、後段を「多念をひがごととおもふまじきことの要文を以て引証され、専修念仏はいずれにも偏執せぬ念仏往生の義であることを明らかにされた(Ref『一念多念文意』註釈版聖典 解説 p676)。合掌。

滋賀組仏教婦人会第一回役員会 五月三十日(木)出講 at 西方寺

滋賀組総会 六月九日(日)九時半より at 専徳寺

仏教壮年会お聴聞の会 六月二日(日)二十時より

仏教婦人会例会 六月十六日(日)十九時半より

著作編集兼発行元(本願寺派 正覚寺内) 〒520-0501 大津市北小松四五二番地

077-596-0166、FAX077-596-0196 住職 堅田 玄宥